

研究要旨：

潰瘍性大腸炎に対する標準術式は現在、回腸囊を作成する回腸囊肛門吻合術、または回腸囊肛門管吻合術が標準術式で術後経過は良好である。回腸囊炎は通常は抗菌剤が有効で改善し、本研究班では回腸囊炎の診断基準の作成、提言、治療指針の作成、内視鏡診断アトラスの作成を行ってきた。現在は従来の治療に反応しない難治例の存在が明らかになり、これらの症例では術後QOLが低下する。「難治性の回腸囊炎」の詳細は明らかになっておらず、本プロジェクト研究は「難治性の回腸囊炎」について明確な定義、鑑別診断を含めた診断基準、適正な治療法、予後などを明らかにし、コンセンサスステートメントを作成することを目的としている。

研究方法は現状では諸家の意見の一致するステートメントがないことから、ガイドライン作成に準じて①Clinical Question (CQ) 作成 ②文献検索、選定③ステートメントの作成 を行い、回腸囊炎の診断は modified PDAI を使用することとした。「難治性の回腸囊炎」については、「難治性回腸囊炎」の用語は一般的ではなく、本プロジェクトでは一般に用いられていることが多い「慢性回腸囊炎 (Chronic pouchitis)」とすることとした。CQ の作成は共同研究者によって行い、CQ 作成を行った。現在は文献検索を終了し、選定作業中である。

潰瘍性大腸炎に対する回腸囊手術後の回腸囊炎は通常、抗菌剤で改善するが、これらの治療で十分効果のない慢性回腸囊炎は術後 QOL 低下の要因となり、本症の定義、診断、治療、予後は明確ではなく、これらを明らかにすることが必要である。本プロジェクトでコンセンサスステートメントを作成し、臨床に使用することは患者の QOL 改善のために重要と考えられる。

河合和美氏 (聖路加国際大学情報センター)

共同研究者

東大二郎 (福岡大学筑紫病院外科)
池内浩基 (兵庫医科大学炎症性腸疾患講座外科)
高橋賢一先生 (東北労災病院大腸肛門外科)
石原聡一郎先生 (東京大学腫瘍外科)
小金井一隆先生 (横浜市民病院炎症性腸疾患科)
篠崎大先生 (東京大学附属医科学研究所腫瘍外科)
板橋道朗先生 (東京女子医科大学消化器・一般外科)
小山文一先生 (奈良県立医大中央内視鏡部)
木村英明 (横浜市大市民総合医療センターIBD センター)
水島恒和 (大阪大学消化器外科)
渡辺和宏 (東北大学消化器外科)
大北喜基 (三重大学消化管・小児外科)
根津理一郎 (大阪中央病院外科)
大塚和朗 (東京医科歯科大学消化器内科)
横山薫 (北里大学消化器内科)

A. 研究目的

潰瘍性大腸炎に対する標準術式は現在、回腸囊を作成する回腸囊肛門吻合術、または回腸囊肛門管吻合術が標準術式で術後経過は良好である。回腸囊炎の諸家の報告により頻度は異なるが、約20%の症例に発症し、本研究班では回腸囊炎の診断基準の作成、提言、治療指針の作成、内視鏡診断アトラスの作成を行ってきた。回腸囊炎は通常は抗菌剤が有効で改善するが、従来の治療に反応しない、休薬が困難、再発を繰り返すなどの難治例が存在し、これらの症例では術後QOLが低下する。「難治性の回腸囊炎」については諸家に意見があり、詳細は明らかになっていない。本プロジェクト研究は「難治性の回腸囊炎」について明確な定義、鑑別診断を含めた診断基準、適正な治療法、予後などを明らかにし、コンセンサスステートメントを作成することを目的としている。

B. 研究方法

1. 現状では諸家の意見の一致するステートメントがないことから、ガイドライン作成に準じて①

Clinical Question (CQ) 作成 ②文献検索、選定 ③ステートメントの作成 を行うこととした。

回腸嚢炎の診断は modified PDAI(1)を使用することとした(表-1)。

2. 「難治性の回腸嚢炎」については、文献上は「難治性回腸嚢炎」の用語は用いられることは少なく、通常は「慢性回腸嚢炎(Chronic pouchitis)」が用いられていることから、本プロジェクトでも対象疾患は「慢性回腸嚢炎(Chronic pouchitis)」することとした。

C. 結果

CQ の作成は共同研究者によって行い、合意のもとに CQ 作成を行った(資料1)。現在は文献検索を終了し、選定作業中である。

D. 考察

潰瘍性大腸炎に対する回腸嚢手術後の回腸嚢炎は通常、抗菌剤で改善するが、これらの治療で十分効果のない難治例(慢性回腸嚢炎)は術後 QOL 低下の要因となる。本症の定義、診断、治療、予後は明確ではなく、これらを明らかにすることが必要である。本プロジェクトでガイドライン作成に準じてコンセンサスステートメントを作成し、臨床に使用することは患者の QOL 改善のために重要と考えられる。

E. 結論

潰瘍性大腸炎に対する回腸嚢手術後の慢性回腸嚢炎について、定義、診断、治療、予後を明らかにするコンセンサスステートメントの作成は患者の QOL 改善のために重要である。

F. 健康危険情報

なし

G:研究報告

なし

H. 知的財産権の出願、登録状況
なし

I. 文献

1) Shen Bo, Achkar JP, Connor JT, et al: Modified pouchitis disease activity index. A simplified approach to the diagnosis of pouchitis. Dis Colon Rectum 2003 46:748-753